

# いまこそソーシャルワーク

青森県ソーシャルワーカー協会

田中 弘子  
松田耕一郎

平成十九年八月、岩崎浩三国際委員長から、十月二十・二十一日、社專協とソーシャルケア従事者研究協議会が、国際ソーシャルワーク・セミナーを開催することになり、講演者である国際ソーシャルワーカー連盟会長・イギリスのDavid Jones氏と同連盟アジア選出理事・シンガポール大学のJohn Ang氏を個人的にお招きして、国際ソーシャルワークの定義や教育国際基準の策定に携わった方から、また世界中を回っている方から、ソーシャルワークの国際的動向やソーシャルワーク教育、アジアのソーシャルワークの動向などを、お聞きすることが出来る機会になると思うので弘前でのセミナーを開催してみないかというメールをいただいた。

岩崎先生は青森県ソーシャルワーカー協会の再建時に、講演で力添えをしてくれたり、弘前学院大学大学院教授時代には、私が応援しているの青年や友人の恩師でもあり、まさしく協会のネットワーキングである。当協会のセミナーを検討中であつたことから、早速準備に入った。

十月十八・十九日「第一回 ソーシャルワークセミナー」を弘前にある青森県武道館で開催した。

テーマは「世界及びアジアのソーシャルワークの動向&社会福祉はこれでいいのか」とした。

一日目は、国際ソーシャルワーカー連盟会長David Jones氏の「ソーシャルワークは世界を住みやすくする」と題し、五十年を迎えた連盟の歴史と、グローバル化した社会の中で、それに対応したソーシャルワークの再生と役割・展望について講演した。

続いて同連盟アジア太平洋選出理事のJohn Ang氏が、子どもの教育が国の発展の源、速歩き等のスポーツをすることによる健康作りの予防医学が、シンガポールのソーシャルワーク以前に現在一番に求められていると講演した。

二日目は、弘前学院大学社会福祉学部の八巻正治教授が「ニュージールランドの福祉から学ぶ多文化共生社会のまなざし」というテーマで自身で撮ってきた現地の写真を紹介しながら、精神保健福祉を主としたニュージールランドの障がい者福祉に

ついて講演した。ニュージールランドでは、すでに大規模施設は解体閉鎖され、グループホームという形で住宅街に市民と混じって暮らしている。また、先住民マオリの人たちを軸とした多文化・多民族国家の形成を図ってきたニュージールランドゆえ、機能的弱者（障がい者）とのインクルージョン（共生）も進んだ。ここが日本との違いであると結んだ。

続いて弘前大学大学院助手で理学療法士・福祉住環境コーディネーターなどの資格を持つ赤池あらた氏が「社会資源のネットワーキングへの人と職能団体の意義と限界」と題して、ソーシャルワークにおける人的資源を整理し「異なる専門職が職種の壁を越えて共に力を合わせて活動する」ハイパープロフェッションナルワークを提起、変わっていく価値観に対応したこれからの支援のあり方と可能性について語った。

三人目の講師は、青森県自閉症支援研究会の代表・平川大輔氏で、同研究会の発足からの活動を紹介し、地域での自閉症支援の機能の拡がりネットワーキングの必要性を述べ、自閉症の人たちに住みやすい社会は、誰にでも住みやすいはずと強調した。その後、参加者との質疑応答があり、それぞれの参加者が自己紹介と共に、二日間の講師の問題提起を受け、自分の専門職者としての自省を語る

と共に、各職場での課題について話しあった。二日間の参加延べ人数は平日の開催であったが、八十名で、参加費のみの運営であったが赤字をださずにすんだ中身の濃いセミナーになった。

Jones会長の主張する「わかりやすく且つ確かな専門職者による社会のあらゆる分野で困っている人を、社会運動と連携して支援していく」機関調整の機能が求められている」ということばや、今回青森県にまで動向し、通訳を下さった、岩崎国際委員長の訳による「ソーシャルワークの定義」ソーシャルワーク専門職は、人間の福利（ウェルビーイング）の増進を目指して、社会の変革を進め、人間関係における問題解決を図り、人々のエンパワメントと解放を促していく」という言葉が心に残った。戦争・飢餓・貧困・不平等と混迷の深まる今こそ、世界を日本を変え、誰にでも住みやすい社会を作っていくソーシャルワーカーの仕事が求められているのである。

Jones会長、Ang理事と共に津軽三味線のライブに行ったり、交流会も楽しい時間であった。

私が子ども政策視察で北欧三カ国を周っていた不在時に、セミナー実施のため動いてくれた当協会事務局である指定障がい者支援施設、である「の家あうん」には感謝である。